

本講義の最大の特徴は、「模擬コンセンサス会議」という形式にある。「模擬コンセンサス会議」についての一般論はウェブページ (<http://hps2.sci.hokudai.ac.jp/clone/>) に記してあるので、ここでは本冊子の趣旨も考慮して、もっと具体的なことについて記す。

講義のテーマは「クローン技術の是非」とし、受講者には「この問題について受講者の間でコンセンサスをまとめ発表する」ことを最終的な目標として課した。

まず5回にわたり、クローン技術の是非について考えるのに必要であろうことがらを、「専門家（の卵）」から説明した。大学院理学研究科生物科学専攻の大学院生と大学院文学研究科の大学院生がそれぞれ、クローン技術およびその意義、クローン技術にまつわる倫理的諸問題について基本的知識を提供した。さらに授業担当教員が、大学院生の説明でこぼれ落ちた議論を提示した。いずれの回も、90分のうち30分前後を質疑にあてた。また、受講者に各種の関連情報を提供するために、受講者用のウェブページを開設し、クローン技術に関する書籍や新聞記事などを紹介した。さらに、受講者のみが読み書きできる「掲示板」もウェブページ上に設置し、教室外でも相互に意見交換できるようにした。

つづいて、6月1日の日曜日に、午前10時から午後3時まで正味4時間半あまりにわたって「鍵となる質問」のとりまとめを行なった。具体的には、受講者の間でクローン技術の是非についてコンセンサスをまとめようと試みてもらう。すると、どのような点で意見の違いがあるか、なぜそうした意見の違いが生じているのか、などが次第に明らかになるので、それらを（コンセンサスをまとめていくうえでの）「鍵となる質問」へとまとめ上げてもらった。

つづく3回の授業は、「専門家（の卵）」に「鍵となる質問」に答えてもらい、それをふまえて、専門家と学生との間でディスカッションを行なった。そして6月29日の日曜日に、遠友学舎において、10時から17時まで正味6時間20分をかけ、議論を重ねて「コンセンサス」をまとめていった。主役はあくまでも学生たちであり、教員は議論の整理役（ファシリテータ）に徹した。まとまったコンセンサスは、多くの人々に開かれた「発表会」を最後の授業時間に開催して、公表した（ウェブページでも公表している）。なお、コンセンサスをまとめるにあたっては、「これこれの点については、これこれの理由で合意を見ることができなかった、というコンセンサスも可」という方針で臨んだ。

今回の経験から、学生たちは、一定の条件が満たされれば、きわめて活発に議論するし、他人の意見に耳を傾けて、それを批判的に吟味しようとし、その過程で理解を深めていく、ということがわかった。その条件とは、次のようなものである。

- ・議論のテーマが、「自らの問題」と実感できるようなものであること
- ・専門家からの多様な意見・観点のどれもが、それぞれに理由・根拠をもつものとして提示されること
- ・議論のための十分な時間が与えられること
- ・意欲のある学生（のみ）が集まること

全学教育（教養教育）の重要な柱の一つは、学生たちに、「科学技術に関心をもち、自ら積極的に関与・発言していくことの大切さを理解させ、そのために必要な態度・技能を習得させること」であろう。「模擬コンセンサス会議」という方式は、そのためにきわめて有効であることを実感した。